

学位請求論文要旨

新渡戸稲造の人格論と社会経済思想

谷口 稔

<はじめに>

新渡戸稲造（1862～1933）は、農学、植民政策、思想、教育等、幅広い分野に渡って活躍した人物であるが、本稿は新渡戸の人格論に着目し、農業思想、植民思想、教育思想等の社会経済思想が人格論というベースの上で展開されていたことを論ずるものである。

新渡戸研究はさまざまな人達によって今までなされてきたが、検討の俎上にあげられるべき3つの見方を示しておきたい。第1は、新渡戸の偉大さを褒め称え、新渡戸が行った事績を無批判に受容する見解である。確かに新渡戸は幅広い分野で活躍したが、あまりに多くの事を引き受けたため、ある分野においては十分責任を全うできたとはいえない面もある。また、新渡戸の宗教観は基督教と東洋思想が複雑に入り組んでおり、基督教の枠内に入るのかどうかという問題もある。第2は、新渡戸が台湾統治及び植民政策に関わったことにより、体制一辺倒の人間であったと全面否定する見解である。現代の視点からすると、植民政策は日本の対外拡張路線の一翼を担うものであり、民族を越えて他国を統治することは、支配・服従の關係に繋がると受け取られる可能性がある。しかし、詳細を検討していくと、新渡戸の台湾統治は、当時の日本政府及び台湾総督府のとった政策とはその内実を異にしている。今の基準で先人を批判するのは「歴史の後知恵」であろう。当時の日本の状況下で、どのような理念を新渡戸が持ち、それを実践していこうとしたのかを研究する必要があると思われる。第3は、最も多く見られるものであるが、新渡戸の教育や国際連盟事務局次長としての働きは高く評価できるが、植民政策では当時の日本の潮流に流されて誤った方向に行ってしまったとする見解である。教育面ではプラスの働きをしたが、植民政策ではマイナスであり、差し引きプラスになるという見方をする人もいる。これは、一見、説得力を持つように見えるが、新渡戸が日本人に対してはすばらしい働きをしたが、台湾人には服従を強いたとするのは、平等を説くクエーカーの思想から見て論理矛盾であり、本来、新渡戸がとるスタンスとは思われない。本稿は上記の典型的な3つの見解を批判的に検討しつつ、新渡戸の人格論に着目し、その人格論の上で展開された農業思想、植民思想、教育思想を論じたものである。

本稿では、次の3点に留意しながら考察を進めた。第1は、従来の新渡戸研究では、新渡戸の人格論と政策論が別々に議論され、両者が十分に交流し合って論じられてこなかったように思われるが、本稿では、人格論を踏まえた上で、それが新渡戸の政策にどのように反映したのかという視点で論じた。第2は、新渡戸の封建制の理解のあり方である。一般に封建制は悪しき過去の産物であり、新しき時代にはふさわしくないと考えられている。しかし、新渡戸は、封建制に伴う人格的信頼関係の面においては親和性を有していると思われる。これは、新渡戸が幕末に生まれ、封建制の弊害を実体験していないということもあるであろう。また、新渡戸の少年時代は、明治の思想的混乱期であり、その時期と比較すると江戸時代の方がまだ精神的に安定していたと新渡戸の目に映ったのかもしれない。新渡戸は日本の封建制に問題点を認めつつも、江戸時代は「武士道」が機能しており、「忠」が人間同士を信頼の上で強固に結びつけていたと見ている。武士道は、日本の封建時代に花開いた日本の思想と述べており、悪しき封建制の土壌の中でという捉え方はしていない。この封建制への親和的態度という点は、新渡戸の研究者があまり指摘してこなかった点である。新渡戸の関心は武士道にあったのではなく、精神的デモクラシーともいうべき「平民道」にあったという見方をしている研究者は少なくない。確かにそう見方もできるのであるが、新渡戸が封建制を全面否定する立場をとらなかったという点は強調してしかるべきだと思われる。封建制のマイナス面を認めつつも、武士道を生んだ母体としての封建制に人間同士を結びつける機能があると見ていたのではないだろうか。第3は、人間形成の点で新渡戸の果たした功績である。新渡戸の少年期は、江戸時代の宗教や思想が否定され、人間が生きていく倫理観を確立するのが難しかった時代であった。明治に入り「武士道」を担う武士はもはや存在せず、武士に代わる存在が必要とされた。新渡戸は農工商の中で、武士の剛毅木訥の精神を継承するのは商工ではなく農民であると見ていた。それゆえ、国民の大多数が農業に携わっている当時の日本において、農民倫理の確立が急務であった。その農民倫理をいかに形成するのかを扱った書が『農業本論』（1898年）であったと本稿は捉えている。新渡戸の名著とされる『農業本論』は農業関係の書であるが、農民倫理の確立というところに焦点を当てると、『武士道』（1900年）、『修養』（1911年）へと続く人間形成論の端緒と捉えることも可能なのである。

<本稿の構成> 4つの章で構成されている。

第1章は、新渡戸の思想の核となった人格論をとりあげた。「人格」という概念は、江戸時代には存在せず、井上哲次郎が *personality* の訳語として「人格」をあてたのが1890年代初頭と言われている。井上は、当初、儒教の教えにある、まっすぐに正しい徳を積み上げていく人格像をイメージしていたが、それが、カント哲学の *Person* の意味を持つようになり、大正期には、ペルソナ及びスリー・イン・パースン（三位一体）というキリスト教的内容を含むものへと変遷していく。

新渡戸はどのようにして自己の人格を形成したのであろうか。新渡戸自身の人格形成に重要な働きを為したのは、クエーカーリズムとカーライルの思想であった。札幌農学校で教え込まれたピューリタニズムは結局のところ新渡戸の信仰の血肉とはならず、神との直接の交流を唱えるクエーカーリズムとカーライルの「力への意志」の哲学の影響を受けて、新渡戸は自らの「人格」を形成していった。しかし、それを日本の青年にあてはめる時は、基督教や西洋思想に限定せず、幅広く東洋の宗教や思想においても人格形成は可能であるという立場をとった。その人格論の一般化において、新渡戸が注目したのが武士道であった。武士道精神は、若き日、新渡戸にも教え込まれたものであったが、武士階級の消滅と共に社会から忘れ去られる運命にあった。

新渡戸は1900年に『武士道』を米国で発表し、世界から注目された。徳目の最高位に忠を置き、忠を支えるものとして義と礼があり、義を支えるものとして仁、勇、智の三本の鼎足があるとした。そして、礼を支えるものとして、仁と誠を置いた。最終的に武士が希求したものは名誉であり、名誉の反対が恥である。欠陥を含む武士道であったが、忠を最高位に置く武士道に、新渡戸はキリスト教世界の犠牲の精神に近いものを見出した。19世紀後半、西洋文明の唯物主義、功利主義の波が怒涛の如く日本に押し寄せ、かつての日本の武士が持っていた高き精神が死滅してしまう危機を感じていた。その時、新渡戸は古き武士道の精神性に着目し、武士道の優れた点を抽出し、時代の流れに沿った生き方を模索したと思われる。『武士道』の中では明言を避けているが、武士道の忠の対象が、封建君主から神へと向けられることを新渡戸が期待したことは十分に想定される。そこに新渡戸が将来の日本に託した期待が感じられる。新渡戸は『武士道』を英語で発表したが、本稿は、日本の武士道を外国人に説明するにあたって、新渡戸がいかに慎重に英単語を選んでいるかに着目した。例えば、義と訳される原語は、*rectitude*, *justice*, *righteousness* と3つあるが、日本人の義は *rectitude* を用い、聖書における義は *righteousness* が使われている。*righteousness*

は信仰と関係している語であり、聖書には多用されているが、*rectitude* は全く聖書には出てこない語である。このことは武士道と聖書がいかに乖離しているかを示しているが、*justice* が両者をつなぐ語として使用されており、武士道と聖書の世界が細き線でつながっていると新渡戸は考えていたと思われる。

第2章は、『農業本論』に焦点を当て、新渡戸の農業思想及び農民倫理の形成について論じた。新渡戸は札幌農学校教授として日本の農業をつぶさに観察し、日本の産業の向かうべき方向性を考えていたが、その農業思想の集大成と言えるものが『農業本論』である。新渡戸の農業論の特質は次の4つの点に集約できる。第1は、農業を軽視した国は滅ぶという思想を持っていた点である。第2は、農本主義ではなく農工商の均衡的發展を望んでいた点である。第3は、農工商の物質的交流だけでなく、精神的交流を重視した点である。剛毅木訥なる農民は、都市の知識人層と交わることにより視野が広がり、他方、都市住民も夏休みなどに農村に行き、農民と交流することにより、素朴さ・純朴さを回復することができると新渡戸は考えた。また、農民の保守的観念が都市の急進化を緩和する作用もあると指摘している。新渡戸の農業・工業・商業の三足鼎立論は、市場形成のみならず、その精神面においても一国全体を俯瞰したものであり、新たな学問領域を切り開くものであった。第4は、農民の倫理形成に力を注いだ点である。農民倫理の形成にあたって武士道をモデルとしてどのように組み立て得るのか、新渡戸は苦心したのであろう。主体的に自己を確立する徳として「勤勉」、「進取の気象」、「自由」に着目し、宗教に開かれていく人間を理想とした。「農民道」とも言える農民のあるべき姿を希求していこうとした点に新渡戸の人間形成論の原型がある。

第3章は、植民思想をとりあげた。新渡戸研究の中で最も繊細さが要求される分野である。新渡戸は、台湾の殖産興業の委託を受け、1901年に台湾総督府に赴任した。同年、『糖業改良意見書』を台湾総督に提出し、甘蔗栽培を進言した。当時、世界の大勢は甜菜糖だったが、甘蔗の品種を変え、大機械の導入により、甘蔗での巻き返しが可能と判断した。糖業に注目したのは、農業・工業両部門にまたがるため、高い成長率が期待でき、糖業がその後の台湾経済を支えるであろうと予測したからでもある。糖業生産は飛躍的に伸び、台湾植民政策は新渡戸にとって成功体験として植え付けられていく。その後、植民政策のエキスパートとして、植民政策全体を論じたのが『植民政策講義』である。新渡戸は、植民の終局目的を「物」ではなく「文明の進歩」に

置いた。「世界土地共有論」、「地球の人化」といった地球規模での発想は、理想主義、非現実的と批判されるが、今後の地球の人口増加を考えていく上で避けて通れない課題であろう。

第4章は、新渡戸の人格論が最もよく表れた教育思想を論じた。新渡戸は一高、東大のような狭いエリートの世界だけでなく、教育を受ける機会のなかった人にも力を注いだ。その一つの表れが、札幌遠友夜学校である。貧しさ故に学校に行く機会を奪われた子どもたち（一部は大人）に無料で教育を提供し、また、当時、高等教育への進学が極めて限られていた女子の教育にも、東京女子大学の学長に就任する等、積極的に関与した。そして、日本もいずれはアメリカのような女子教育に開かれた国になることを目指した。女性の人格に焦点を当て、良妻賢母という枠に縛られない教育を提起したところに、時代に先んじた新渡戸の教育的視点がある。

<結語> (1) 新渡戸の人格論の特質 (2) 人格論から見た社会経済思想

(1) 新渡戸の人格論の特質

新渡戸は人格形成に重きを置いた思想家であった。新渡戸の育った少年期は江戸時代の思想や宗教が否定され、西洋文明が流入してくる中で、人間の拠って立つ基盤をどう形成するのが大きく問われた時代であった。そういう中で、新渡戸自身の人格形成は、クエーカーリズムとカーライルの思想によってなされた。全人類が「内なる光」を持っているというクエーカーの教えから東西両文明をつなぐ思想を新渡戸なりに探究し、神秘主義的な面を持ちつつ、自分自身の人格形成を図ったのであった。

しかし、新渡戸は、自己の人格の形成のあり方をそのまま当時の日本にあてはめようとはしなかった。ド・ラヴレーから「宗教教育のない日本で、どのようにして道德教育がなされているか」との問いに接し、武士道の重要性に気づかされた。武士道の核である忠、義、礼の中に、キリスト教の精神に近いものを感じ、良質な部分は残して、農工商に引き継いで平民道への道筋を描こうとした。

新渡戸の人格形成論が初めて登場するのは『農業本論』である。従来、『農業本論』は、農業分野の書物と考えられてきたが、農民倫理を描いた人間形成論の端緒でもあった。新渡戸は『農業本論』において、主体的自我を形成する徳目として「勤勉」「進取の気象」「自由」をあげ、それを支えるものが、武士道の仁、誠に相当する共同体を維持する働きであった。「落ち穂拾い」は仁に、自己と他者の境界の境を守る精神は「誠」

に相当すると考えられる。そして、「禁教令」が解除された日本では、最上層にキリスト教を含む「宗教」を置くことが可能となった。この三層構造で人間形成を図るといふ点は『武士道』と似ている。忠の対象が神であることを「宗教」と捉えることもできるからである。新渡戸は1900年の『武士道』の出版を待たずして、『農業本論』において、「農民道」なるものを展開したことになる。そして、それをさらに一般化したのが『修養』（1911年）、『世渡りの道』（1912年）、『自警』（1916年）の3部作であったのではないだろうか。

新渡戸の人間形成論のベースには、縦軸と横軸があるが、縦軸は天との交流、横軸は社交性が基軸となっている。縦軸の天との交流は、新渡戸にとっては神との交流である。それを天という儒教にも通じる語で表現し、キリスト教の「罪」を武士道の「恥」で代替させて説明しようとした点に新渡戸の特質がある。そういう意味で、新渡戸はキリスト教の本質を伝えるのに従来から使われている語でもって表現しようとした思想家ということになるであろう。

新渡戸は明治維新以後の新しい日本のデモクラシーに期待しつつも、封建制を全面否定せず、むしろ親近感をもって見ていた。『武士道』の第1章「道德体系としての武士道」で次のように語っている。

「武士道を生み育てた社会条件はすでに消え果てて久しい。(中略) 封建制の子である武士道は、その母なる制度より生きのびて、今なお私たちの道德の歩む道を照らしている」

1890年にドイツで記した博士論文『日本土地制度論』には次の記述が見られる。

「アダム・ミュラーと同様に、封建制度に高貴さを与えたものまでいっしょに消失せぬことを願うものである」

封建制に対して、新渡戸が福沢や新島のように否定的でなかったのは、封建社会においては各自の役割が与えられており、忠を大切にする日本人の特質が人間同士を強く結びつけていた点に価値を見いだしていたからであろう。士農工商という身分の違いがありながらも、自分の分を守り、責任を果たす社会の中に、人間同士の信頼に基づく優れた点を見出していた。新渡戸は、ヨーロッパ中世封建制を高く評価したミュラーや武士道を生んだ日本の封建制に理解を示したド・ラヴレーから大きな影響を受けており、この封建制への親和的態度は、新渡戸の特質としてあげられる。

(2) 人格論から見た社会経済思想

本稿ではまず、農業思想を検討した。『農業本論』は、農工商の物質的交流にとどまらず、精神世界の相互交流も重視し、農を行うことによる人間性の変革にまで視野を広げたものであった。新渡戸は、札幌農学校卒業後、開拓使となったが、そこで接した北海道の農民は、進取の気象に欠き、貧窮にあえぐ劣悪な生活環境の下で暮らす人々であった。明治期は、もはや封建社会のように身分が固定している社会ではなく、自分の努力次第では豊かになることが可能な時代であった。北海道には開拓できる土地が大きく広がっており、意欲をもって農業に携わる人間が求められていた。そういう状況下で、上述の農民倫理の確立が唱えられたのである。

次に植民政策であるが、本稿は、現代的視点からすると欠けの多いと見られる新渡戸の植民政策論においても、人格論がベースにあると主張するものである。新渡戸は、開発の延長線上に植民があり、植民政策は、原住民と日本との協同作業と捉えていた。問題は、新渡戸がどのような植民政策を展開したかであるが、新渡戸は植民国と植民地の関係を、「支配と服従」ではなく「親と子」という観点で捉えており、アダム＝スミスの「子はいずれ親元を離れて独立する」という植民地独立論に理解を示している。また、同化政策ではなく、自治政策を支持している。これは独立へのプロセスを用意する事が、人間と同様に自然であり人道的だからである。新渡戸は、人種間に優劣があったとしても、それは一時的なものであり、人種の優劣は逆転する可能性があると考えていた。固定的な人種的偏見は基本的には持っていなかったと思われる。新渡戸は請われて台湾の糖業生産に取り組んだが、台湾の農民のために次の4つの政策を準備していた。甘蔗が台風や害虫によって打撃を受けた場合に備えて「保険」に入ること、製糖業者に搾取されないように「糖業組合」を作ること、製糖会社の利益に与ることができるように農民に株を分配すること、そして、一方的に廉価で甘蔗が買い叩かれないために「公定購入価格」を設けるという配慮をしていた点である。残念ながら、これらの政策は台湾総督府の採用するところとはならなかったが、新渡戸の植民政策が人道的なものを含んでいた証左になる。但し、新渡戸は植民地拡大論者であり、植民地を増やすことが日本の安全を増やすことにつながると考えていた。全体的に新渡戸は、植民政策をナショナリズムと植民地とのコラボレーションという2つの視点から捉えていたと言えるであろう。物質的豊かさの向こうの精神的豊かさを終局目的とする新渡戸の植民思想は、理想が背後にある。新渡戸は社会体制の変革などは主張しなかったが、その時代の枠組みの中で可能性を最大に引き伸ばし、「進取の気象」に着

目して、社会発展を試みた人物と位置づけることができるのではないだろうか。

最後に新渡戸の教育思想であるが、教育面における活動は人格論を前面に出すものであった。特に女子教育、札幌遠友夜学校においては、新渡戸独自の小さき者、弱き者を慈しむ教育思想の展開が見られる。精神を重視した新渡戸の思想は、狭き国家主義から自由であり、社会の桎梏から解放されたものであった。

精神に開かれた人格の思想が、日本の古き伝統を維持しつつ、新しい方向へと向かおうとする人達を取り込み、日本社会の進むべき方向性を指し示した。新渡戸は、西洋思想一辺倒になるのではなく、また国家主義に傾くこともなく、細き狭き道を歩んでいった。急速な近代化の中で、日本人が心をどこかに置き去りにしていることを危惧し、近代日本のあるべき姿としては単なるヨーロッパ精神の移植でない道を模索した。キリスト教信仰を保持しながら、武士道精神に良質なものを見出し、それを継承発展させ、日本的表現を用いてその内実はキリスト教に通じる精神を、農業、植民、そして、教育において展開していこうとしたのが新渡戸稲造であった。